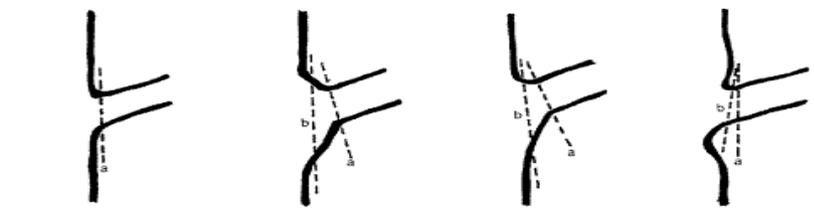


6 林 業

項 目	作 業 内 容
<p>(1) 枝打ちの目的と時期</p> <p>(2) 枝打ち実施の注意点</p>	<p>(今月の作業のポイント)</p> <ul style="list-style-type: none"> ○枝打ちの目的と時期 ○枝打ち実施の注意点 ○枝打ちの方法 ○枝打ち用刃物 <p>枝打ちは、次の目的により必要に応じて行う作業である。</p> <p>ア 無節・完満・均一な年輪幅の良質材を生産する。</p> <p>イ 遅くまで枯れ枝が残るヒノキでは、大径材生産を目指す上で、材価の低下を招く死節（しにぶし）の発生を防止する。</p> <p>ウ 林内を明るくして、下層木の成長を促す。</p> <p>4～9月は樹木の樹液流動期であるため、樹皮が剥げて傷口が大きくなり、枝打ち後の巻込みが遅れたり、腐りが入ることがあることから、枝打ちの適期は樹液の流動が鈍くなる10月から早春の3月までとされている。なお、厳冬期は傷口が凍る恐れがあるため、避けるのが無難であり、樹液流動開始直前の2月下旬から3月が最も良い。</p> <p>枝打ちには多くの労力がかかるとともに、樹木にとっては幹に傷を付けられることになるので、実施に当たっては次の点に注意する。</p> <p>ア 生産目標を定めて適切に実施する。</p> <p>例えば、10.5cmの無節柱材生産を行う場合には、2～3年ごとに、枝下直径が6cm程度の位置まで打ち上げる。</p> <p>イ 一度に高くまで打ち上げると、葉量減少により成長が著しく悪化し、巻込みも遅くなって腐りや変色の原因となるので、1度に打ち上げる高さは1.5m程度に抑える（図1）。</p> <div style="text-align: center;">  <p>枝打ちする長さ 1.5m程度 枝下直径 8~9cm</p> <p>枝打ちする長さ 1.5m程度 枝下直径 6~7cm</p> <p>12cm 角柱材目標 10.5cm 角柱材目標</p> </div> <p>図1 枝打高と枝下径</p>

項 目	作 業 内 容
<p>(3) 枝打ちの方法</p>	<p>ウ 曲がり木、病虫害等による被害木、間伐候補木等、枝打ちによる材価の上昇が期待できない木は実施しない。</p> <p>エ 太い枝の枝打ちや、幹に傷を付けるなど不適切な枝打ちをすると、切口や傷口を介して、材の内部に淡黄褐色～灰褐色の着色を生じるボタン材（写真1、2）や腐りが発生し、材価が著しく低下する原因となる。</p> <p>オ 林縁2～3列の木については、林内乾燥や風害防止の観点から、枝打ちを実施しないか、林内に比べて軽い枝打ちにとどめる。</p> <p>カ 高所作業を行う場合は、次の事項について注意すること。 (ア) 梯子を用いる場合は、はずれないように確実に据え付けること。 (イ) 作業中は、必要に応じて安全帯を使用すること。（労働安全衛生規則第518条では、高さが2m以上の場合には、労働者に安全帯等を使用させ、危険防止の措置を講じなければならないこととなっている。） (ウ) 高所作業の直下には、他の作業者を立ち入らせないこと。</p>
	<p>枝打ちを実施する場合、残枝長を短く、幹に傷を付けないように、良く切れる刃物で切り口は平滑に、枝の形状に応じた箇所を切断するようにする（図2）。</p> <div style="text-align: center;">  <p>A 垂直な枝 B 枝陸の発達した枝 C 生長の旺盛な枝 D 生長の低下した枝または枯枝</p> <p>枝の切断位置 a：適 b：不適（BとCは幹に変色発生、Dはその危険性あり）</p> <p>変色を避け、かつ残枝を短くする枝の切断位置（藤森隆郎）</p> </div> <p>図2 枝の切断位置</p>

項 目	作 業 内 容
(4) 枝打ち用刃物	<p>枝打ちに使用する主な刃物は、枝打ち専用のカマ・ナタ・ノコを用いる。</p> <p>ア カマは、比較的小さい枝を能率的に打つことができる。</p> <p>イ ナタは、やや大きい枝に適しているが、他の道具に比べ高度な技術を必要とする。</p> <p>ウ ノコは、枝打ち用ノコやパイプソーを用いる。能率はやや落ちるが、高度な技術は必要なく、ボタン材になりにくい特徴がある。</p> <p>なお、いずれの刃物でも、良く切れるよう手入れをしてから使うことが肝要である。</p>

(作成 林業政策課)